

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニューズレター
1998.6.1

50

情報知識学会事務局 発行 〒 110-8560 東京都台東区台東 1-5-1 凸版印刷 (株) 内
TEL:03-3835-5692 FAX:03-3837-0368 E-mail:LDE01013@niftyserve.or.jp

ISSN0915 1133

目 次

[巻頭言] インターネット時代の日本の学会の役割：情報発信	(石塚英弘)	1
[予告] 第3回 SGML/XML 研修フォーラム		3
[報告] 平成10年度総会議事録および資料		4
[提案] 学会創立10周年記念事業の共同研究テーマ	(国沢隆)	10
[お知らせ] 専門用語研究会シンポジウムのご案内		11
[報告] 平成10年度研究報告会	(藤原譲他)	12

【巻頭言】

インターネット時代の日本の学会の役割：情報発信

情報知識学会理事 石塚英弘 (図書館情報大学)

世の中、インターネット全盛である。そこで、「学会は不要。インターネットさえあれば良い」といった学会不要論や、「学会の役割は人に会うこと、特に偉い先生と知り合いになること。それだけが残るだろう」といった学会懇親会論？があるが、本当だろうか。私の考えは否。「情報発信こそが学会の役割。インターネットを活用して情報発信を行う学会だけが21世紀に生き残る」が私の説である。以下、自説を述べてみたい。

学会の役割の一つに学術出版、すなわち、学会誌や論文誌の刊行がある。これは学会としての情報発信である。しかし、学術出版は経済的には困難の多い事業である。解説などを載せる学会誌はまだ読者が多いから良いが、論文誌となると読者が少ないから経費を購読者の人数割りにすると高額すぎて、ますます購読者が減ることになる。そこで、理工学系の学会では投稿者から別刷代として投稿料を取ることが従来から行われている。しかし、これも値上が過ぎると投稿者は「それなら別の学会に投稿しようか」となる。事実、英文論文の場合は、円高のお陰で海外の学会への投稿が増えている。その結果、日本の学会の英文論文誌はますます厳しい状況に置かれるようになった。もちろん、基準を満たした論文誌には政府からの刊行助成金が出るし、学会側も郵送費を減らすために宅急便を使う等々の努力をしているが、厳しいことには変わりがない。

一方、世の中インターネット大流行である。そこで「情報発信は学会の機能としてではなく、投稿者本人がインターネットを使ってすればよい。その方が瞬時に世界に広まる」といった学会懇親会論や学会不要論が出てきたのだろうが、これには落とし穴がある。インターネット上の情報は玉石混合というよりも殆どがゴミだから、折角の論文もゴミの一つと見なされる恐れが

大である。学会の審査により、オーソライズされたことが大切である。また、学会が情報発信することが大切である。なぜなら、投稿者の発信では勝手に内容を修正してしまうかもしれないからである。それでは信頼性の乏しいものになってしまう。また、それを利用して、他人の論文を見てコピーし、それを自分の論文に仕立ててしまう不心得者が出てくるだろう。本来の著者が「自分の方が先に書いた」と先取権を主張しても、その証拠を提出することは困難である。学会の出版物ならば論文の受付日付が記録されており、第三者である学会が証明してくれるが、個人出版ではそれはできない。やはり、学会が学会の責任において情報発信するのが一番であり、それが学会の責務だと思う。また、それを支えるのが事務局である。なお、懇親会だけの学会では偉い先生と知り合いになった時点で当初の目的を達するから、学会費を払ってまで学会に留まる意義は無くなる。会員の脱会が続出しては会として存続できないだろう。それに、結婚相手を見つけるための会のような感じで、学会とは違う気がする。

最近、グローバル化の波が日本の学会に押し寄せている。英文論文誌を刊行している学会に海外の出版社から「当社が引き受けましょう」と話がある。円高のためか安いので、事務局の合理化になると思い、印刷外注の感覚で頼んだ所もあると聞く。ただし、先方は「出版社であって、印刷会社ではありません」と論文のデータベースごと持っていかれたとか。これでは情報発信の元を失ったことになる。また、アメリカの学会の日本支部ができて、企業会員を募っている。企業としては、その会員になれば、同分野の日本の学会の会員口数を減らすことになる。グローバル化とは呑み込まれることなのだろうか？否、日本の学会がインターネットを使って世界に情報発信し、世界の中で確固たる寄与をすることではなかろうか。学会は研究論文の一種の格付機関でもある。外国の格付機関のみに依存するのは危ういのではないか。

翻って、我が学会は如何にという訳だが、学会誌は創刊号から SGML 方式による電子出版であり、情報発信を強く意識したものとなっている。また、会員の中には日本の各分野を担って来られた方々が多い。そして事務局は、我が学会の主旨に共鳴された超一流の方がボランティアで獅子奮迅の働き、正に有り難い話である。学会が学術会議の登録団体になれたのも彼の誠意と尽力の賜物であった。小さいがキラリと光る学会、その情報発信は各方面から期待されているのだ。

石塚英弘 図書館情報大学教授 Tel. 0298-59-1394 (dial in); Fax: 0298-59-1093; e-mail: ishizuka@ulis.ac.jp

【予告】

第3回SGML/XML研修フォーラム

情報知識学会電子管理システム部会は平成8年度から実行委員会を組織し、標記のフォーラムを継続開催しています。今秋は下記の概要で計画中であり、プログラム等の詳細は確定次第、お知らせします。学会員は半額の特典があります。どうぞ、ご参加ください。今回は従来にも増して一般(¥28,000)からの参加を期すため、学会員の紹介があれば参加費を1万円割引しますので、お知り合いの方々へ積極的にお伝え願います。

1. 開催趣旨

情報化が社会のあらゆる場面で一層進展する中で、各種・各様の文書情報の電子化が社会的に重要な課題であるとの認識は、ますます深まっている。こうした「電子化ドキュメント」のための基本的方式として、すでにSGMLが国際標準となっている。そして昨年来、米国を中心として、SGMLの実際的適用性を高め、かつインターネットによる配信との親和性を確保したSGMLの実施規格として、XMLが提案され、その急速な普及が見込まれるという状況になっている。

第3回SGML/XML研修フォーラムでは、こうした情勢の展開を踏まえて、XMLの具体的な適用を中心課題とし、政府・自治体関連の動向をはじめとして、対応製品の開発状況および企業等での適用事例などを幅広くとりあげ、参加者間での意見交換を含め、電子化ドキュメントに関わる諸氏に有益な啓発・学習機会を提供することをめざす。

2. 対象者 : 本学会を中心とした学術研究者。地方自治体および企業等でSGML/XMLの受発注にかかわり、またはSGML/XML適用のデータベースに携わる担当者および管理者。
3. 内 容 : XMLの動向、製品紹介、行政（特に政府系）の現状と展望、各企業の具体的実施例。
4. 期 日 : 平成10年10月21日（水）～22日（木）10:00～17:00
5. 定 員 : 100名（予約制・先着順）。
6. 会 場 : グランドヒル市ヶ谷 3階 珊瑚の間（100名収容）
東京都新宿区市谷本村町4番1号（市ヶ谷駅より徒歩3分）
7. 参加費 : 一般¥28,000。当日入会者¥22,000。
リピーターおよび学会員から紹介された人¥18,000。
学会員および協賛団体会員¥14,000。学生は予稿集代のみ¥2,000。
8. 申 込 : 電子メール、FAX、郵便のいずれかで参加者氏名、郵便番号、住所、電話・FAX番号、資格別参加費金額（紹介者氏名）、請求書要不要を情報知識学会事務局へ連絡する。

情報知識学会 平成10年度総会議事録

1. 名 称 情報知識学会 平成10年度総会
2. 開催日 平成10年5月23日(土) 16:30~17:00
3. 会 場 東京都千代田区神田和泉町1番地
凸版印刷株式会社 本社ビル1階ホール
4. 議 長 藤原鎮男会長
5. 議 事
 - (1) 開 会・開会挨拶：藤原鎮男会長
 - ・総会有効成立確認：事務局長
出席者27名、委任状提出94名、合計 121名。
総会定足数(会員の10%)を超え、総会成立
 - (2) 報告事項・平成9年度事業報告：藤原讓副会長
 - (3) 承認事項・平成9年度収支決算報告：根岸副会長
 - ・監査報告：月見里監事
 - ・平成10年度事業計画説明：藤原讓副会長
 - ・平成10年度収支予算説明：根岸副会長
 - ・役員改選の件：藤原鎮男会長

★上記の報告および提案は原案通り承認された。

★上記の詳細は後掲の総会資料通り。

以 上

平成10年度総会資料

1. 会員数

	H 9. 3. 31現在	H 9. 4. 1 ~ H 10. 3. 31		H 10. 3. 31 現在
		入 会	退 会	
正会員	327人	19	39	307人
学生会員	10人	6	2	14人
賛助会員 ()は口数	15法人 (50)	6 (16)	0 (0)	21法人 (66)
合 計	352	31	41	342

2. 平成9年度事業報告

①会議

- | | | | |
|--------------|-------------|-----|-----------|
| ・平成9年 5月14日 | 17:30～20:00 | 理事会 | 於：凸版印刷(株) |
| ・平成9年 5月24日 | 9:45～10:30 | 総会 | 於：凸版印刷(株) |
| ・平成9年 7月23日 | 17:30～20:00 | 理事会 | 於：凸版印刷(株) |
| ・平成9年10月22日 | 17:30～20:00 | 理事会 | 於：凸版印刷(株) |
| ・平成9年12月19日 | 17:30～20:00 | 理事会 | 於：凸版印刷(株) |
| ・平成10年 3月24日 | 17:30～20:00 | 理事会 | 於：凸版印刷(株) |

②講演会・セミナー・シンポジウム・見学会

- ・「情報知識学会・第5回（1997年度）研究報告会」主催 於：凸版印刷(株)
平成9年5月24日
- ・「慶応義塾大学／湘南藤沢キャンパス見学会」主催
平成9年10月21日
- ・「第2回SGML／XML研修フォーラム」主催 於：慶応義塾大学
平成9年11月11～12日
- ・「知識の自己組織化と専門用語シンポジウム」 専門用語研究会と共催
於：日本学術会議講堂 平成9年11月14日
- ・「第4回著作権シンポジウム」主催 於：凸版印刷(株)
平成9年11月27日
- ・「'97 情報学シンポジウム」 日本学術会議と共同主催 於：日本学術会議講堂
平成10年1月13日～14日 本学会から藤代理事が実行委員として協力

③刊行物

- | | |
|-------------------------|--------------|
| ・ニューズレター 43号 | 平成9年4月1日発行 |
| ・第5回（1997年度）研究報告会講演論文集 | 平成9年5月24日発行 |
| ・ニューズレター 44号 | 平成9年6月1日発行 |
| ・ニューズレター 45号 | 平成9年8月1日発行 |
| ・ニューズレター 46号 | 平成9年10月1日発行 |
| ・ニューズレター 47号 | 平成9年12月1日発行 |
| ・情報知識学会誌第7巻第1号（SGML特別号） | 平成9年11月11日発行 |
| ・ニューズレター 48号 | 平成9年2月1日発行 |
| ・情報知識学会誌第7巻第2号 | 平成10年3月20日発行 |

3. 平成9年度('97.4.1~'98.3.31) 予算書

(単位: 円)

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部 門	使用科目	使用金額
前年度繰越金	206,518	ニューズレター 編集部門	印刷代・送料	1,200,000
会費収入*	3,000,000		編集経費等	120,000
臨時会費収入	1,000,000	学会誌編集部門	印刷代・送料	1,200,000
利息	1,000		編集経費	20,000
学会誌・別刷代	80,000		原稿料	0
懇親会参加料	20,000	企画部門	セミナー備品等	10,000
講演論文集代	80,000		講師謝礼等	20,000
事業収入	1,200,000	研究報告会	講演論文集印刷代	150,000
雑収入	12,482		懇親会経費	50,000
		総務部門	入会案内作製費	0
		事務局・その他	理事会実施費用	150,000
			事務用品代	50,000
			通信費・送料	120,000
			印刷代(封筒等)	100,000
			振込手数料	10,000
			総会実施経費	30,000
			交通費その他	170,000
		小計		3,400,000
		事務局機構拡充積立金		2,000,000
合計		予備費(次年度繰越金)		200,000
5,600,000		合計		5,600,000

*会費収入は平成9年3月31日現在の会員数より算定

4. 平成9年度('97.4.1~'98.3.31) 決算書

(単位: 円)

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部 門	使用科目	使用金額
前年度繰越金	206,518	ニューズレター 編集部門	印刷代・送料	1,340,228
会費収入（個人）	1,462,120		編集経費等	177,000
会費収入（法人）	2,160,000	学会誌編集部門	印刷代・送料	393,750
臨時会費収入	408,000		編集経費	13,270
利息	487		原稿料	0
学会誌・別刷代	67,000	企画部門	セミナー備品等	392,735
懇親会参加料	0		講師謝礼等	220,000
講演論文集代	159,500	研究報告会	講演論文集印刷代	147,000
事業収入	1,226,000		懇親会経費	0
雑収入	71,656	総務部門	入会案内作製費	0
小計	5,761,281		理事会実施費用	85,997
事務局機構拡充 積立金	1,400,000	事務局・その他	事務用品代	43,567
			通信費・送料	119,467
印刷代（封筒等）	84,525			
振込手数料	9,030			
総会実施経費	25,000			
業務委託費	1,350,000			
交通費その他	362,624			
小計	4,764,193			
		事務局機構拡充積立金	2,000,000	
		予備費（次年度繰越金）	397,088	
合計	7,161,281	合計	7,161,281	

5. 貸借対照表

平成10年3月31日現在（単位：円）

科 目	借 方	貸 方	備 考
1. 資産の部			
現金	0		
普通預金（三和銀行）	128,768		
郵便振替口座	1,768,320		
定額郵便貯金	500,000		
2. 負債の部			
未払費用		148,050	学会誌7巻2号印刷代
3. 正味財産 （内当期正味財産増加額）		2,249,038 (669,520)	
合 計	2,397,088	2,397,088	

監査報告書

情報知識学会

会長 藤原 鎮男 殿

作成日 平成10年5月15日

情報知識学会 監事 矢戸駿太郎 

情報知識学会 監事 月見里禮次郎 

当監事は、情報知識学会定款第19条に基づく監査証明を行なうため、情報知識学会の平成9年4月1日から平成10年3月31日までの財務諸表について監査を行ないました。

この監査に当たって、当監事は一般に公正妥当と認められる監査基準に準拠し、通常実施すべき監査手続きを実施致しました。

監査の結果、当監事は上記財務諸表が平成10年3月31日現在の情報知識学会の財務状況を適正に表示しているものと認めます。

6. 平成10年度事業計画

- ①会議
- ・総会 平成10年5月23日開催
 - ・理事会 年4回開催
- ②講演会・シンポジウム
- ・第6回(1997年度)研究報告会開催(5月23日)
 - ・第3回SGML/XML研修フォーラム(10月21日～22日)
 - ・第5回著作権シンポジウム(今秋)
 - ・その他
- ③研究部会
- ・知的財産権、危機管理、電子管理システム、CODATA
ビジュアライゼーション。
- ④刊行物
- ・ニューズレター 第49号～52号発行予定
 - ・学会誌 第8巻第1～3号発行予定
 - ・第6回(1998年度)研究報告会講演論文集発行
 - ・その他(研究会報告、テキストなど)

7. 平成10年度('98.4.1～'99.3.31) 予算書

(単位：円)

収入の部		支出の部		
収入科目	収入金額	部 門	使用科目	使用金額
前年度繰越金	397,088	ニューズレター 編集部門	印刷代・送料	580,000
会費収入(個人)	1,800,000		編集経費等	20,000
会費収入(法人)	1,800,000	学会誌編集部門	印刷代・送料	900,000
利息	1,000		編集経費	100,000
学会誌・別刷代	50,000		原稿料	0
懇親会参加料	0	企画部門	セミナー備品等	690,000
講演論文集代	100,000		講師謝礼等	1,000,000
事業収入	2,300,000	研究報告会	講演論文集印刷代	250,000
雑収入	51,912		懇親会経費	0
小計	6,500,000	総務部門	入会案内作製費	100,000
事務局機構拡充 積立金	2,000,000		理事会実施費用	100,000
		事務局・その他	事務用品代	50,000
			通信費・送料	200,000
			印刷代(封筒等)	100,000
			振込手数料	10,000
			総会実施経費	20,000
			業務委託費	1,800,000
			交通費その他	380,000
			小計	6,300,000
			事務局機構拡充積立金	2,000,000
			予備費(次年度繰越金)	200,000
合計	8,500,000	合計		8,500,000

*会費収入は平成10年3月31日現在の会員数より算定

8. 役員人事

会長	藤原 鎮男	東京大学 名誉教授
副会長	藤原 譲 細野 公男 根岸 正光	神奈川大学 教授 慶応義塾大学 教授 学術情報センター 教授
理事（五十音順）	浅田 雄司 （新任）芦沢 実 有川 節夫 石塚 英弘 岩淵 幸雄 （新任）国沢 隆 後藤 智範 高橋 仁一 小山 照夫 菅原 秀明 田隅 三生 （新任）田畑 孝一 （新任）田村 喜代子 次田 皓 （新任）中川 優 長瀬 眞理 永村 真 名和 小太郎 西脇 二一 平田 周 深見 拓史 松田 芳郎 （新任）安永 尚志 山本 昌弘	金属材料技術研究所 ㈸日立製作所 主任研究員 九州大学 教授 図書館情報大学 教授 日本創造学会 理事 東京理科大学 講師 神奈川大学 教授 大日本印刷㈸ 学術情報センター 教授 国立遺伝学研究所 埼玉大学 教授 図書館情報大学 教授 国立国会図書館 東京理科大学 教授 和歌山大学 教授 静岡大学 教授 日本女子大学 教授 関西大学 教授 奈良大学 教授 IT経営研究所 所長 凸版印刷㈸ 本部長 一橋大学 教授 国文学研究資料館 日本電気㈸C & C事業企画部長
監事	穴戸 駿太郎 月見里 禮次郎	環日本海経済研究所副理事長 えんがわ 代表

【提案】

学会創立10周年記念事業の共同研究テーマ

学術研究用データベースに対する知的所有権とデータベース構築支援のあり方

東京理科大学理工学部 国沢 隆

近年の計算機・通信技術の急速な発展により、我々の研究スタイルも大きく変わり、多くの研究者がネットワークを通じてデータベースを利用している。また、ヒトゲノムプロジェクトで提唱されているように、膨大なデータが高度に組織化されたデータベースを開発することによる新しい科学の誕生も期待されている。デジタル化・ネットワーク化の進展は、研究活動ばかりでなく経済活動や社会生活に対しても、非常に大きな技術的可能性をもたらしつつある。このような背景のもとで、データベースに関して新しい法律の立法化を含めた法的整備が様々なところで検討されている。データベースについてのどのような知的所有権が学術研究の発展にとって好ましいかを考察し提言することは情報知識学会として意義があろう。法的議論の中では、学術研究用データベースも商用データベースも、当然のことながら、区別なく取り扱われる。しかし、前者、殊に自然科学のデータを集めたデータベースには次に述べるような特徴がある。まず、学術研究の対象となるデータは観測、実験、あるいは調査などによって取得されるが、その多くの場合に公的資金（税金）が投入されている。次に、学術研究分野では、（著作権の保護対象外に置かれている）アイデアや数学公式なども学術論文での引用という形式で、（著作権とは異なり）期限なく、尊重されていて、レフェリー制度が監視機能を果たしている。さらには、データが将来どのように科学の発展をもたらすか予想できないために、データは本来公開されなければならない。このような特徴を考慮した上で、学術研究用データベースについての知的所有権のあり方を検討してはいかがであろうか。データは公開した方がいいことは言うまでもない。したがって、法的な権利は放棄しないが、データは自由に使えるように公開することも考えられる。しかしながら、研究者のそれまでの研究成果の蓄積と多くの労力を基にして生まれたデータの公開を積極的に促進するためには、データを提供する研究者が納得できる条件の整備とそれを許す支援体制を構築することが必要であり、検討すべき課題であると提案する。

最後に、データベースの構築・公開体制の整備をすることが、様々な分野での情報論的新手法の開発を促進するばかりではなく、「情報」、「データ」、さらには「知識」といった概念をより掘り下げることにつながり、結局は「情報学」の体系化に寄与することを付け加えておきたい。

<事務局注>

上記はニューズレター No.48（本年2月号）にて標記の共同研究テーマを募集したところ、国澤隆会員から寄せられた提案です。

会員各位の積極的なご意見・ご討議をお待ちします。

事務局 E-mail:LDE01013@niftyserve.or.jp

FAX:03-3837-0368

【お知らせ】

「文字シンポジウム」のお知らせ

〒102-0082 東京都千代田区一番町4-6
一番町中央ビル2F (JIST 内) 専門用語研究会

このたび専門用語研究会では情報知識学会との共催で「文字シンポジウム」を下記の通り開催いたします。

今回は、文字の機能を視点として、漢字に配慮し、各方面の研究の概要と動向を、客観的に捉えようとするものです。文字については様々な意見が様々な場面で討議されている現状を鑑み、序論的な講演を行おうとするものです。

ふるって、ご参加下さい。

記

日時： 平成10年11月6日(金) 午後1時30分～5時
場所： 日本学術会議 講堂(地下鉄千代田線 乃木坂駅下車すぐ)
主催： 専門用語研究会・情報知識学会
後援： 情報科学技術協会・情報処理学会(交渉中)
申込方法： 下記申込書(コピー可)で専門用語研究会まで郵送またはFAX
でお申し込み下さい。(会場が満員になりしだい受付を中止させていただきます。)

プログラムおよび講師(予定)：

挨拶	柴田 武	(専門用語研究会会長)	1:30～1:35
趣旨説明	仲本 秀四郎	(IRIS)	1:35～1:40
1. 文字概説	矢島 文夫	(アジア・アフリカ図書館長)	1:40～2:15
2. 日本語表記	石井 久雄	(武蔵大学教授)	2:15～2:50
3. 漢字構成	松岡 栄志	(東京学芸大学教授)	2:50～3:25
(休憩)			3:25～3:40
4. 脳と文字	杉下 守弘	(東京大学医学部教授)	3:40～4:15
5. 漢字コード	宮沢 彰	(学術情報センター教授)	4:15～4:50
専門用語研究会総会			5:00～5:20
懇談会(はあといん乃木坂)			5:45～7:30

資料代 会員 2,000 円 一般 3,000 円 学生 1,000 円
(懇談会参加者は別途 6,000 円)
(資料代等は当日受付で申し受けます)

以上

専門用語研究会 行 (FAX. 03-3262-8960)

「文字シンポジウム」参加申込書

氏名 :
機関名 :
連絡先住所 :
電話便号 : FAX. 番号 :
懇談会出欠 : 出席 欠席
領収書有無 : 有(機関名) 有(個人名) 不

平成 10 年度情報知識学会研究報告会プログラム

{編集部注} 本年度の研究報告会は 5 月 23 日 (土)、凸版印刷 (株) 本社ビル 1 階ホールにおいて学会員および一般参加のもと、下記のプログラムによって開催されました。

テーマ: 21 世紀の情報化社会を先導する情報知識学の展望
—これまでの 10 年とこれからの 10 年—

- < 特別講演 >
- 10:00-11:00 「21 世紀の情報化社会を先導する情報知識学の現状と展望—これまでの 10 年、これからの 10 年—」 藤原 譲 (神奈川大学) …… 座長 田畑孝一 (図書館情報大学)
- << 研究発表 >>
- セッション 1 : 情報解析・基礎 …… 座長 細野公男 (慶応義塾大学)
- 11:00-11:20 「専門コミュニケーションにおける言語と非言語」 山本 昭 (国学院大学)
- 11:20-11:40 「言語計画論としてのターミノロジーの理論」 佐々木 由香 (三重県立看護大)
- セッション 2 : 情報アクセス …… 座長 根岸正光 (学術情報センター)
- 11:40-12:00 「語の出現頻度情報に基づく適合度順検索の問題点」 相良 佳弘 (慶応義塾大学)
- 12:00-12:20 「Z39.50 プロトコルによる日本語書誌データ情報検索システム」
江草 由佳、真野 恭久、宇陀 則彦、石塚英弘 (図書館情報大学)
- 12:20-13:00 ————— 昼 食 —————
- セッション 3 : コンテンツ管理と高度利用 …… 座長 浅田雄司 (金材研究所)
- 13:00-13:20 「エレクトロニック・レコードマネージメントとメタデータ記述: 国際アーカイブズ標準化規格策定の基準」 安澤 秀一 (駿河台大学)
- 13:20-13:40 「インターネット上での分散型材料データベース: データフリーウェイの最近の活動」 中島 律子、志村 和樹、館 義昭、加納 茂樹、横山 憲夫、辻宏和、藤田 充苗、岩田 修一 (JST 他)
- 13:40-14:00 「合金研究論文テキストからの知識抽出」
星本 健一、松尾 利行、康村 昌司 (金材研 他)
- セッション 4 : 情報発信 …… 座長 後藤智範 (神奈川大学)
- 14:00-14:20 「VRML と JAVA を用いたオリエンテーリング教育用ゲームの作成」
高久 雅生、石塚 英弘 (図書館情報大学)
- 14:20-14:40 「WWW ブラウザからアクセス可能な多言語全文データベース構築システム」
中尾茂岳、ミリアン ダルトア、前田 亮、阪口 哲男、杉本重雄、田畑 孝一 (図書館情報大学)
- 14:40-14:50 ————— 休 憩 —————
- セッション 5 : 情報流通・社会 …… 座長 石塚英弘 (図書館情報大学)
- 14:50-15:10 「情報化社会の組織メンバーの類型」 板倉 宏昭 (東京大学)
- 15:10-15:30 「情報公開制度の効率的運用のための情報流通に関する考察」
岩淵 幸雄、斎藤 伸雄 (凸版印刷 他)
- 15:30-15:50 「データベースに関する新しい知的所有権と科学の発展への影響」
国沢 隆、次田 皓 (東京理科大学)

【報告】

平成 10 年度 情報知識学会 研究会報告

研究会組織委員長 藤原 譲 (神奈川大学)

本研究会は 10 回目を迎えたが、この期間は加速度的な情報化とボーダレス流通の発展の時に当たり、情報全体が大きな曲り角にさしかかっている時である。研究会の準備の際、来るべき 21 世紀の展開に対して当学会はどのように対処すべきかの検討が行われ、「情報知識学はもっともらしい名称であるが、いったい何の役に立つのか?、そもそも情報知識学の定義はどうなっているのか?」という疑問が出された。

まさに次世代情報化社会の方向付けに関し情報知識学の確立と存在意義が問われているのであるから、それを主題にした特別講演を持ち、それを中心にして会員全体で検討することになった。

一般の研究発表は公募を中心に進め、テーマはつぎようになっていた。

1. 電子出版、電子図書館、フルテキストデータベース
2. マルチメディア、電子ミュージアム
3. デジタルコンテンツの流通技術、体制と著作権処理
4. 用語、シソーラス、電子化辞書、機械翻訳
5. 情報知識の構造解析、モデル化、意味解析、自己組織化、可視化
6. 専門分野における情報知識の生産・組織化・表現など
7. その他情報知識に関連する研究、開発。

準備期間は十分とはいえなかったが、幸いに数多くの応募があり、テーマの設定は時宜を得たものであり、全体として大きな成果が得られたと言える研究会であった。プログラムは内容に応じて次のような 5 つのセッションに構成された。

- | | |
|-----------------|-----|
| 1. 情報解析、基礎 | 2 件 |
| 2. 情報アクセス | 2 件 |
| 3. コンテンツ管理と高度利用 | 3 件 |
| 4. 情報発信 | 2 件 |
| 5. 情報流通と社会 | 3 件 |

計 13 件の研究はレベルが揃って高く、それらが一つの会場で発表された。これまでの研究会では複数の会場で平行して講演されたが、今回は講演当たりの時間を短縮することで、会場間の移動とそのタイミングで時間を無駄にすることが避けられた。また統一することにより議論が活発になり、また参加者相互の意志の疎通にも役立ったとの感想が寄せられた。詳細は各セッションの司会者の報告を参照して下さい。特別講演は 10 年前の第一回研究会で「情報知識学試論」と題して、当時の情報知識の基礎研究の考え方を筆者が披露させていただいた関係から、その後の 10 年の経過と今後の 10 年の展望をすることになった。情報知識学の定義、これからの情報知識の基礎となるべきモデル、理論、パラダイムとそれに基づき日本独自の計算機ハードウェアアーキテクチャ、ソフトウェアシステム、情報資源、流通方式を願って「21 世紀の情報化社会を先導する情報知識学の展望」の題目で、情報知識学の振興プロジェクトと併せて特別講演をさせていただきました。この内容も別項目の紹介を御参照されたい。

なお例年会場を提供していただき、また研究会全般について便宜を図っていただいた株式会社凸版の関係者および事務局のかたがたにこの場を借りてお礼を申し上げます。

特別講演：「21世紀の情報化社会を先導する情報知識学の展望 ―これまでの10年とこれからの10年―」 藤原 譲（神奈川大学）

座長：田畑孝一（図書館情報大学）

米国科学財団（NSF）は本年より5年間にわたる Knowledge & Distributed Intelligence と名付けた新たな研究費補助事業を開始している。この事業は、(1)Knowledge Networking, (2)Learning & Intelligent Systems, (3)New Computational Challenges の3分野からなっており、1998年は総額5,000万ドルの補助となっている。これに応募した申請件数は1,200に達し現在審査中である。NSFが重要視し米国の各界がそれに応えるこの事業の指向するところは本学会の目的に一致するところが大きく、このことから、本学会の存在意義がますます大きいものとなってきていることがわかる。

藤原氏の講演によると、情報知識がこれからの21世紀に向けてますます重要であることは論を待たない。しかしながら、それを支えるべき計算機械がこれまでのものと質的な変革をとげなければ、それに対処していくことができない。これまでの計算機械は、符号を処理するのみで意味を直接扱うものではなかった。氏によると、類推、帰納推論、仮説生成を扱える数理モデルが存在し、それによって新しい概念または新しい関係を生成することができる。その数理モデルで表現される知識演算を直接実行する新しい計算機械を創るべきである。そのような計算機械の規模はかなり大きなものになるが、それを実現すると、Turing Machine の呪縛から解放された情報知識処理の新世界を構築することができるであろう。

NSFの Knowledge & Distributed Intelligence の事業では人間と機械の協調作業の向上が特に重要視されているが、藤原氏の提唱する新計算機械では知識そのものを機械内部で処理するので、機械の外側のみならずその内部処理過程（いわば思考過程）を人間が直接理解できるので、人間と機械の協調作業に格段の進展が期待できると思う。

セッション1：情報解析・基礎

座長：細野公男（慶應義塾大学）

本セッションでは、ターミノロジーの問題を扱った2件の発表が行われた。最初の発表は、非言語の種類、通常の言語との境界および互換性、さらに同定・配列・検索上の問題点を上げたものである。専門コミュニケーションにおいて絵記号や文字記号など視覚的表現がよく使用されているが、ターミノロジーの分野で考えられてきた原理・方法を、こうした非言語の世界へ適用する場合の考慮事項を明らかにしようとするものである。2番目の発表は、ヴェスターの言語計画理論を紹介することによって、その理論と方法が、今日の用語標準化、用語集編纂、用語データベースの設計の中に間接的に生かされていることを示した。この発表は、国際的なレベルでの言語計画の必要性を示唆するものである。情報の解析にはそれを荷う媒体についての理解が不可欠であるので、ターミノロジーに関する研究は、本学会の研究テーマの主要関心事の一つといえよう。

セッション2：情報アクセス

座長：根岸正光（文部省学術情報センター）

情報アクセスと題する第2セッションでは、最近、実用システムへの適用が進んでいる適合度順検索システムの有効性に関する実験報告と、各所に分散するデータベースを一括して検索できるものとして期待が集まっている、Z39.50プロトコル準拠のサーバー／クライアントの開発報告が行われた。

相良佳弘「語の出現頻度情報に基づく適合度順検索の問題点」は、情報検索システムにおける適合度順検索の有効性を検討するため、DAIALOGの数種のデータベースに対して、TARGET コマンドによる検索実験を行って、結果をまとめたものである。結果として、システムによる適合度順位付けが利用者自身の判定と一致する度合いは、対象とするデータベースや検索主題によって差を生じるが、概して低いことが分かった。

これに関して、適合度検索の有効性は、適合度計算の方式、データベースの内容、検索主題という三者の組み合わせにおいて検討する必要があり、実験の設計を含めて、さらに追究してゆくべきであろうなどの意見が出された。

江草由佳他「Z39.50 プロトコルによる日本語書誌データ情報検索システム」は、近年欧米で実用化が進展しつつある、情報検索用プロトコル Z39.50 に準拠するサーバー、クライアントを開発して、検索実験を行った結果を報告するものである。Z39.50 対応のシステムはわが国での開発事例が少ないので、ここでは、日本語書誌データの検索を当面の目標としてシステムを開発し、サーバー、クライアントともに良好に稼働することを確認した。

これに関して、各種の日本語コードへの対応、有料サイトへ接続する際の認証機能に関して質問があった。これらの機能は Z39.50 で規格化されたので、これに準拠したシステムの開発は可能であるとの回答がなされた。

セッション 3：コンテンツ管理と高度利用

座長：浅田雄司（金材研究所）

1. エレクトロニック・レコードマネジメントとメタデータ記述：国際アーカイブズ標準化規格策定の基準（安澤／駿河台大学）

記録文書、記録保存が必要な文書とその選定、文書記録媒体、保管場所、これらを総称してアーカイブズという、これは講演後、後援者に聞いた話をまとめた私のアーカイブズ認識である。日本はこの分野で大きく遅れているという。従来の文書は紙が主体であった。近年 FD、CD などそれ自身では可視化されていない種々の媒体が出現し、またそれが文書として認められるようになった。これは媒体だけでなく、それを取り扱うソフトも関係する。そんな中で国際標準に向けての活動を多くの参考文献を示しながらの講演であった。もう少し時間が欲しかったように思う。

2. インターネット上での分散型材料データベース：データフリーウェイの最近の活動（中島／JST）

複数の機関が相互にデータベースを持ち、相互にデータを共有し、データベースを利用し合うシステムとしてデータフリーウェイ（DFW）を開発した。システムの概要とシステムが備えているツール等について報告した。質問に答えて：海外のデータベースとのフォーマットの互換性はあるか（項目数が多くかなり難しいが、ツール開発で可能と思う）、将来どのように発展させていくのか（一般公開、課金制について参加機関により意見が異なるので調整する必要がある、学術以外は課金制も考慮する必要がある）

3. 合金研究論文テキストからの知識抽出（星本／金材技研）

研究者の合金設計を支援する目的で開発したバーチャルコンサルタントシステムについて報告した。このシステムは曖昧検索、自然言語処理技術を用いた METIS システム、構文解析・意味解析による KE システム、から成る。論文対象を「ニッケル基超合金」という分野に絞っても、論文から研究者が必要とする知識情報を半自動的に抽出するシステムを開発することは大変なようである。一層の進展を期待したい。

セッション 4：情報発信

座長：後藤 智範（神奈川大学）

本セッションでは、JAVA、VRML といったインターネット上のアプリケーション開発で使われる最新のプログラミング言語を用いた研究が報告された。

(1) VRML と JAVA を用いたオリエンテーリング教育用ゲームの作成

これは、中学、高校生の遠足などで行われるオリエンテーリングを、1万5千分の1の縮尺の地形図データをもとに、VRMLを用いて3次元画像をbrowser上に表示するソフトウェアを試作したものである。立体地図上での移動に沿って、表示されている方位磁石の針が変化し、利用者にどの方向に進んでいるのかを示す可能にしているのがこのプログラムの特徴である。

(2) WWWブラウザからアクセス可能な多言語全文データベース構築システム

インターネットの普及によって、様々な国の情報資源にアクセスすることが可能となったが、ブラウザに当該言語のフォントが搭載されていないことにより文字化けが生ずる。本報告のシステムは、WebサーバーとWebブラウザの間に、ゲートウェイを置き、ゲートウェイ上で当該ファイルに対し、コード変換および必要なフォントの付加が行われたMHTML形式のファイルに変換し、これをブラウザ側に転送する。当発表では、童話「桃太郎」の日、英、仏の3ヶ国語の表示例が提示された。

セッション5：情報流通・社会

座長：石塚英弘（図書館情報大学）

板倉の「情報化社会の組織メンバーの類型」は、情報技術の高度化の中での組織体コミットメントを考察したもので、組織体コミットメントと情報化のフレームワークの中で、メンバーを組織人型、疎外型、スター型、おたく型の4つに類型化した。情報化と組織体コミットメントが共に高い場合はスター型になるが、組織体コミットメントが低い場合は「おたく型」になる由。最近日本ではおたく型が増加している点と併せて、興味深かった。

岩淵らの発表は、我が国の情報公開制度に注目し、行政の電子文書に採用されたSGMLの普及が急がれること、総合的な文書管理システム、情報流通システム、大量文書を迅速かつ経済的に検索する技術の研究などが必要なこと、情報産業への新規需要の創出効果・投資効果が期待できることを述べた。アメリカがインターネットを活用して情報産業を興し、今の好景気を招いたこと、そしてSGML/XMLの導入を進めていることに、我が国も学ぶべきであろう。

国沢らの発表は、EUの提案、すなわち、DB分野への投資促進を図るために、データの抽出や再利用の許諾を決定する権利を投資者に持たせようという提案、そして、その問題点の紹介である。これは正に大きな問題であり、様々な意見が有り得る。我が学会としても、この問題を議論する場を設けては如何であろうか。

■編集後記

昨年より編集委員に名を連ねさせていただいておりましたが、今号よりニューズレター編集に直接携わることになりました。慣れない作業で難渋いたしました、皆様にご満足いただける出来になっていれば幸いです。

ニューズレター編集委員 山下 泰弘

■複写をされる方に

[R] <学協会著作権協議会委託>

日本国内における、当ニューズレターからの複写許諾は、学協会著作権協議会から得てください。

学協会著作権協議会

〒107 東京都港区赤坂9-6-41

TEL:03-3474-4621, FAX:03-3403-1738

アメリカ合衆国における複写については、Copyright Clearance Center, Inc. から得てください。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA. 01923, USA

TEL: 508-750-8400, FAX: 508-750-4744